



# 福井県

## 中学校長会の窓

福井県中学校長会  
福井県中学校長会広報部  
伊部印刷株式会社  
越前市家久町 29-8-1  
TEL(0778)23-5037

第150号  
令和7年7月15日発行

第74回

### 福井県中学校長研究大会 二州大会

令和7年5月9日(金)  
敦賀市プラザ萬象・敦賀市立図書館

#### 会長挨拶



福井県中学校長会  
会長 野路 佳男  
(明道中学校)

慌ただしい四月、そしてゴールデンウィークが過ぎ、学校も本格的に軌道に乗り始めていく時期となりました。ここ数年、なかなか季節の移り変わりも変化して、春といえども夏を思わせる天気もあるなど、何事にも予測不可能な時代となってきました。校長はその時代の変化に対して様々な判断を委ねられる事が多くなっている中、この敦賀の地におきまして、県内各地より中学校長会の会員が参集の下、令和七年度第七四回福井県中学校長研究大会二州大会を開催できましたこと、大変嬉しく思います。また、本研究大会には、公務御多用の中、福井県教育長 藤丸伸和様、敦賀市教育長 花木秀実様をはじめ、多数の御来賓の皆様のお臨席を賜り厚

く御礼申し上げます。

さて、現在学校では、人口減少・少子高齢化、グローバル化、多様性、デジタル化、人生100年時代等の課題によって、そのような世の中を生き抜く持続可能な社会の創り手を育成することが求められています。「正解主義」や「同調圧力」からの脱却、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現など「日本型学校教育」の良さを受け継ぎ、課題を乗り越え、更に発展させる新しい時代の教育、「令和の日本型教育」の実現に取り組んでいるところです。

また、昨年の十月には県が教育に関する大綱を改定いたしました。基本理念として、「一人ひとりの個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり・子どもが主役の『夢と希望』『ふくい愛』を育む教育の推進」ことこのためにアクション！このような県の理念を私たち校長が理解し、この大綱に書かれている目指す人間像を共有し、チーム福井として進めていくことが福井の教育の発展につながっていくと考えています。また、私たち校長には、働き方改革を進めること、部活動の地域展開にどのように関わり対応していくかな

ど数多くの課題もあります。また、学校現場では、いじめ、不登校、SNSトラブル等の生徒指導上の諸問題、LGBT等に係る人権問題、特別な支援を要する生徒への合理的配慮、教員不足、若手教員の育成、不祥事の根絶など課題は山積みであり、悩みは尽きません。県中学校長会におきましても、それらの情報を共有しながら、解決に向けての方向性を県教委や市町村教委と連携をとりながら示していきたいと考えています。

本日の研究大会は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究主題に掲げ、県内の中学校長の英知を集集し、諸課題の解決に向けて顔を合わせて研鑽を深める絶好の機会となっております。のちほど、四つの分科会に分かれて研究協議を行っていただきます。貴重な教育実践を御提供いただくことに、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり、御指導と御支援を賜りました敦賀市、美浜町、若狭町の各市町当局をはじめ、福井県教育委員会ならびに二州地区の各市町教育委員会に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、開催準備や運営に御尽力いただきました二州地区の校長先生方に心から御礼を申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

#### 役員名目

令和七年度 福井県中学校長会

会長 (明道) 野路 佳男

副会長 (松陵) 小島 義和

副会長 (武生第二) 久島 晋

会計監査 (坂井) 水上 真一

会計監査 (勝山中部) 有島 直孝

会計監査 (明道) 野路 佳男

理事 (福井市) 佐藤 勉

理事 (川西) 大正 千春

理事 (松岡) 野村 博明

理事 (金津) 常廣 一頼

理事 (丸岡) 鈴木 秀卓

理事 (陽明) 山田 善信

理事 (勝山南部) 田邊 千智

理事 (中央) 木村 雄一

理事 (宮崎) 渡邊 進午

理事 (武生第二) 久島 晋

理事 (池田) 飯田 雅裕

理事 (南越前) 今村 憲和

理事 (松陵) 小島 義和

理事 (三方) 高橋 善彦

理事 (若狭) 小浜 加福 秀樹

理事 (中教研) 進明 田中 典子

理事 (中体連) 成和 竹野 亨

理事 (教育研究) 光陽 鈴木 三千弥

理事 (人事行政対策) (大安寺) 堤 清忠

理事 (進路対策) (森田) 高間 祐治

理事 (広報) (朝日) 幸坂 浩

理事 (学力診断) (美山) 岡本 浩之

理事 (庶務) (明倫) 竹澤 宏保

理事 (庶務幹事) (足羽第二) 岸上 尚毅

事務局 (五十嵐) 五十嵐 隆美

事務局 (小林) 小林 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

事務局 (利幸) 利幸

# 県教育長挨拶

福井県教育委員会

教育長 藤丸 伸和氏



第七四回福井県中学校長研究会  
二州大会が、こうして盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

野路会長をはじめ役員の皆様、また、本日お集まりの中学校長会の皆様には、日頃から本県教育力向上のために、多大なる御尽力をいただき、厚く御礼申し上げます。

本大会の研究主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」は、まさに今の時代における教育の使命を端的に表しており、私たちが共有

すべき重要な指針であります。

昨年度改定しました「教育に関する大綱」および「教育振興基本計画」においては、人生二〇〇年時代における「ライフデザイン教育」を今後の教育の方向性の一つに位置付けました。本大会の研究主題は、まさにこうした考え方と目指す方向を一にするものと思います。

本日は、開会にあたり、研究主題に沿って、「ライフデザイン教育」の観点から、私の考えていることを大きく二点、申し上げたいと思います。まず、一点目は、「地域への自信と誇り」の醸成です。

私は長年、県職員としてまじまじりや人口減少対策などに携わってきましたが、福井県民はその謙虚さゆえか、地元の良いさを積極的に語ろうとしない印象があります。もっと良くないのは、「福井には何もない」と自らを卑下する言葉をつい発してしまうこと。「福井には何もない」と言われて育った子供たちが、将来、福井に残りたい、戻ってきたいと思うでしょうか。

私の目標の一つは、この「福井に何もない」という言葉をなくすることです。新幹線が開業し、こうした県民意識にも変化が現れてきました。昨年度のデジタル庁の「ウェルビーイング指標調査」で本県の「幸福実感」は前年度一二位から四位に、民間のブランド総合研究所の調査でも、前年度一九位から五位へと急上昇しています。

新幹線開業による全国的な知名度の向上や、駅周辺や観光地の開発等による「まちの光景」の変化、人の往来の活発化などが、「地域の自己肯定感」の高まりに寄与していると思います。

現在、進めていただいている「ふるさと学習」は地域への愛着を育むと同時に、地域を支えている大人との交流を通じて、社会の担い手としての自覚を促す素晴らしい取組です。子供たちが福井の自然や文化、歴史、産業について学び、それを自らの言葉で表現することで、郷土への誇りや愛着が育まれるとともに、自分の考えを他者に伝える力も養われております。

こうした「ふるさと学習」は、持続可能な社会の創り手を育てるうえでも、非常に意義深い取組であり、また、「地域への自信と誇り」を育むことは、将来「ふくいで働き暮らすこと」への意識向上にもつながります。この意味においては、「ふるさと学習」は、「持続可能な地域づくり」に不可欠な取組であると言っても過言ではありません。引き続き、積極的にお取り組みいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

二点目は、「地域政策と連動した進路指導」への転換です。令和六年三月卒業の県立高校生の進路状況調査では、就職または進学で県内を選ぶ生徒の割合は、普通科系高校一六校の平均で

三六・二％だったのに対し、職業系高校八校の平均は七〇％でした。

職業系高校では地域産業と結びついた実践的な教育を行っており、就職等に役立つ資格も多く取得することができず。求人倍率も高く、専門的な知識や技術を身につけ、即戦力となるプロフェッショナルな産業人材を育てる職業系高校を、県教委として今後は、「プロ人材高校」と呼ぶこととしました。

「地域の宝」を数多く輩出している「プロ人材高校」の魅力をより多くの先生方、中学生、保護者の皆さんに知っていただけるよう、ガイドブックを作成しすべての中学三年生に配布するとともに、新たにプロモーションビデオも制作しました。

今回の県立高校入試においては、全体の生徒数が減少する中、職業系高校への応募者数が前年と比べ増加しました。時代の変化をとらえ、地域に求められるプロ人材を育成する職業系高校の価値が見直

されてきた兆しを感じます。本日も集まりの校長先生方におかれましては、進路指導を担当する先生方を含め、ぜひ職業系高校の「いま」を知っていただきたいと思ひます。

また、併せて、地域の拠点校となる「地元高校への進学者」を増やすことにも御配慮いただければと思います。

そのためには、地域政策や県の将来構想にも関心をもっていただき、「持続可能な地域社会のあり方」や「いま求められる人材」についての最新の知見を得ることや、地元の拠点校や職業系高校へ出かけ、お互いの目標や課題を共有する「中高連携」の一層の強化が必要不可欠です。ぜひ進路指導についての考え方もアップデートしながら、「福井の未来」を担う子供たちを育てていただきたいと思います。

以上、大きく二点、申し上げます。た。「ふるさと学習」をさらに進め、「地域への自信と誇り」を育むこと、「持続可能な地域づくり」に向け、「進路指導の考え方」もアップデートしていくこと、の二点を皆様にごめてお願いしたいと思います。

結びになりますが、本日の研究大会が、今後の中学校教育をよりよいものへと導く実りある機会となることを願い、皆様の御健勝と御活躍を祈念して、祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。





## 分科会報告

01  
第一分科会

## 「カリキュラム・マネジメント」の推進

— 中学校統合に向けた教育課程の見直しと工夫 —

発表者 勝山南部中 田邊 千智

## ◎発表要旨

勝山市の人口は二万人余り、四年間で一〇〇人以上が減少し、出生数は昨年度七六人で少子化が人口減少とともに進んでいる。

そこで令和九年に現在の三校が統合され「勝山中学校」が開校する。勝山高校の敷地内に校舎があり、共用棟もある併設型に近い形での「連携型中高一貫教育」となる。このことが教育課程の編成に大きくかわってくる。

## ①高校との連携を視野に入れた教育課程の編成

勝山南部中学校では、令和四年に勝山高校に「探究特進科」が新設され、探究的な学習について教育課程の中でどのように位置づけ、地元高校を利用していくかが課題となった。

勝山高校の探究活動のスケジュールは、一年生テーマ決定の「ラウンドテーブルⅠ」、一・二年生の中間発表にあたる二月の「ラウンドテーブルⅡ」、二・三年生が探究の成果を発表する、翌年七月の「学びの祭典」がある。「ラウンドテーブルⅡ」に勝山市内の中学二年生が全員参加、見学し、「学びの祭典」には中学三年生が全員参加するように計

画した。生徒は探究の方法や発表へのイメージをもつことができた。

また、三年生が個人探究の発表会を行う際には勝山高校の生徒や教員も参加し、感想や意見をもらうなど三年間のしめくくりとしてたいへん充実したものになった。

勝山中部中学校では、「子どもが主語の教育」を実現するために、生徒が主体的に活動できる時間を十分に確保することが重要だと考え、授業時間の弾力的運用、四五分授業を行った。六校時後の三〇分をプロジェクトタイム（PT）として位置づけ、生徒が主体的に活動できる時間とした。

PTはまず総合的な学習の時間の延長に活用し、地域や保護者と連携して地域貢献活動につなげるなど、より探究的な学びと活動の時間を確保できた。生徒会活動では、生活委員会が学期末に学年を解いた小グループによる全校学習会を企画・運営した。また校則などを見直すため、生徒会執行部が「自主生徒集会」を開催した。分科会形式で興味のあるテーマのところに生徒が集まって議論するという取組である。

②統合に向けた三中学校の工夫  
市内三中学校は、考查問題を各

教科の教員で分担・協力して作成している。目指す学力の一本化とテスト問題作成の時間短縮（働き方改革）が図られた。ワークシートや指導案も共有フォルダに入れて活用するなど広がりがある。

また年間計画において体育祭や学校祭、考查など大きな行事の実施時期を同じにして、三中の交流授業や活動を計画しやすくした。

二年余りの実践で、高校と連携し探究学習を進める効果、生徒が主体的に活動できる時間の確保の重要性が確認できた。高校との接続を考え、五〇分授業に戻しながらPTを確保したり、期間を限定して四五分授業を設定したりすることを考えている。さらに高校も巻き込んだ四五分授業の可能性についても検討中である。

## ◎研究協議

## 【質問・意見】

## ○高校との連携について

・総合以外の教科での交流は過去に英語で試みたことはあったが距離があり難しかった。統合後は、高校教員が数学や英語においてTTで指導に参加することは計画している。

・鯖江中学校は元の丹南高校を仮校舎としている。そこでは鯖江高校の生徒の授業があり、高校生の作ったプログラムで教えてくれたり、体育の授業で模範演技をしてくれたりお互いによい成果があった。中高の時間割が違うのでノーチャイムで動いている。特別教室への移動などはお互いに気

を遣って静かにできていて問題はない。

・現在連携を行っている中学校では、当初高校生と中学生のトラブルを心配し、生徒同士が重なる部分を避けるよう計画する動きもあったが、実際に生活してみると心配したトラブルはなかった。

・勝山高校は普通科も探究を行っているので、探究特進科とだけ連携しているのではなく勝高全生徒が対象。毎回決まった高校生が来るのではない。

## ○授業時間の弾力的運用について

・勝山中部中のPTの計画の煩雑さについて、計画がないと使い勝手はいいが混乱をきたす。しかし細かく計画してしまうと生徒の自由度がなくなる。ある程度、年間を見通せることは必要であり、行事や生徒会活動などに必要な部分と生徒に任せられる部分を年度当初に示す形で運用した。

・四五分授業で生まれた時間を総合の時間で活用した場合、総合の時数カウントの仕方について、時間割を週一時間に変更して調整することをしている学校もある。

## 【グループ協議の報告】

・明倫中は羽水高との連携を計画中。武生三中は武生高との探究活動を始めている。

・角鹿中は小中一貫校で教員同士の乗り入れがある。児童・生徒の成長の様子が分かり先生方にも良い影響がある。

・芦原中は金津高校と中高一貫連携クラスがある。高校生の姿を見て将来の自分を見ることにつな

がり考え方がしっかりしてくる。

・越前中の丹生高との連携型中高一貫教育では、中二で連携クラスを決定するが希望生徒が集まらないのが現状。一度決めても連携クラスから離れてもよいとしたら希望は増えた。猶予を与えるのも必要だと感じる。

・授業時間四五分の運用は本当に標準時数を満たすことができるのか。時程の変更はスクールバスがある学校は難しい。

・教育委員会側から四五分授業はNGと示されている地域もある。四五分で授業を作るのは若手には負担かもしれない。振り返りの時間の確保も必要であり、難しいのではないか。

・松岡中は四五分授業を実施。家庭学習で予習することで五分短い授業をカバーしている。

・清掃の時間をカットして学級裁量の時間を設け、生徒の主体的な活動を促した。教師も生徒も楽しみにしている。

（勝山中部中 有島直孝）



02  
第二分科会

**健康で安全な生活と豊かな  
スポーツライフを実現するための教育の充実**  
 「安心・安全な生活と豊かなスポーツ文化活動を生み出し、自走する生徒を育成する学校改革」  
 発表者 小浜二中 富士 健一

## ◎発表要旨

小浜第二中学校では、平成二十九年度から令和七年度にかけて学校改革を基軸とする「安心・安全な生活と豊かなスポーツ文化活動を生み出し、自走する生徒を育成」するための取組を進めてきた。

①組織体制構築と  
チーム運営による課題改善

## ●学校改革の途筋1

「運営委員会」の権限強化、「報告・連絡・相談」の徹底、重点目標の共有化等、全教職員が学校運営に参画する組織づくりと、子どもを中心に据えた教育活動への見直しを進めた。また、形骸化していた「わたしたちのちかい」をリニューアルし、生徒主体の学校づくりを進めるための経営ビジョンを受けての全教職員参加型チームで目標設定と進捗管理と結果分析を行う学校評価システムを開始した。継続的・発展的に改革が進むよう、次年度の計画案作成にあたってはプロジェクトチームを組織し、パブリックコメントを加味した修正を行いながら、全教職員の合意のもと、次年度に引き継ぐ流れを開発・定着させた。「双方向・参加型学校だより」の発行やブログの活用等により、学校・保護者間情報の送受信を充実させた。「無言清掃」「二〇分間走」の導入や

「王者復活」を目標とした部活動の充実により、職員・生徒・保護者の関係づくりを進め、生徒が健康で安全に生活し、豊かなスポーツ文化活動を展開・発展させるための地盤を固めた。

## ●学校改革の途筋2

令和三年度からは「スクールプラン刷新」「カンファレンス方式の行内研修」「職員会議廃止の継続と遅出勤務制・二期制の導入」「縦割りホーム制による本格的個人探究学習」「自学力向上に向けて宿題の予習化を図る授業改善」「生徒主体の校則見直し」等、アフター・コロナを見据えた学校改革を充実させた。特に、見直しと振り返りの充実を図るレギュレイトフォームを使用し、「自己調整力」を身に付けた「自走する生徒」を育てる学校DXを大きく前進させた。部活動自主練習と自学自習等の放課後活動を選択させる自己調整デーを設定する等、探究サイクルを回す経験も積ませた。

②生き生きとした学校、  
生徒主体の活動を創る

## ●「二中魂」の具現化

「向上・つながり・勤労」の大切さを示す「二中魂」を、各活動場面で問いかけた。小浜二中の共通言語として、途切れることなく大きなう

ねりとなって持続している。

## ●「新たな伝統」の創出

「二中祭」と「立志式」を「生徒主体」に大きく見直した。生徒会や実行委員、縦割りグループ等を中心に据えることで、年々企画運営の質と感動の量、伝統の重みが増している。

## ●「無言清掃」「二〇分間走」の効果

ルーティンを地道に継続することによって力が付くことを生徒が実感しているとともに保護者の評価も高くなっている。

## ●「王者復活」の持つ意味

コロナ禍や部活動地域移行の波に吞まれて活動時間に大きな制約が課せられる中、地道な努力を継続する上で、この言葉が大きな励みや指針となっている。

## ●「自走する生徒」の育成

令和五年度から自己調整型の探究的授業開発に挑戦している。授業では「自己選択・自己決定の場」を与え、自らの最適解を見いだす機会を特に大切にしている。毎週木曜日の放課後一時間半は、「自己調整タイム」とし、部活動の自主練習、学習会への参加、家庭での自学等を自己選択できるようにしている。

③安全・安心な生活と豊かな  
スポーツ文化活動を生み出す  
ための環境整備

●「子供を守り育てる」意識の醸成と共有する公的コミュニティ形成の必要性

「カンファレンス方式の行内研修」を通して、教員同士が世代や立場を超えて語り合い省察する「公的

コミュニティ」の形成を重視している。学校ブログや学校通信にも生徒の参画機会を設け、より開かれた情報発信につなげている。

## ●組織構成の抜本的見直し

育成参画型の組織体制により成果を上げてきたが、昨年度より校務分掌の抜本的見直しを図り、分散・統合・消去・追加を行った。

●部活動地域移行の行政・  
地域団体・学校連携

市内二つの中学校間で働き方改革や地域に開かれた学校という観点で部活動の見直しを進めた。市教委もコーディネーターの配置や検討委員会の設置等、条件整備や保護者への説明を行ってきたが、課題も残っている。行政と地域団体と学校とが同じテーブルで具体的に話し合う場を設けながら、よりよい具体的解決策を見いださなければならぬ。

## ◎研究協議

・小浜二中で取り組まれている二〇分間走や自己調整タイムの取組は魅力的だが、自校でも取り組めるかという難しい部分もある。

・三國中校区では、全ての小学校と三國中で無言清掃に取り組んでおり、かけている音楽もそろえる等、小中で連携した取組をしている。

・「豊かなスポーツライフ」の実現のためには、スポーツの「見る」「する」「支える」各側面から育てる資質・能力を検討すべきである。

・部活動の地域展開が進められているが、どの子も楽しくスポーツ

ができる居場所が必要である。四五分授業にすることで、生み出された三〇分を、子どもたちが自身がい方々を考え運動に取り組む時間にすることも可能である。

・マラソン大会を行っている学校とそうでない学校がある。また、マラソン大会をやめて楽しいスポーツ行事に切り替えた学校もある。

・マラソンは辛いスポーツなのに人気がある理由を子どもたちに考えさせるのも「豊かなスポーツライフ」の実現につながるのではないか。

(上中中 大谷由喜男)





03  
第三分科会

# 自分を敬愛し他者と協働しながら 自己実現を図るための自己指導能力を 育成する生徒指導の充実

発表者 森田中 高岡 祐治

## ◎発表要旨

森田中は、年々生徒数や学級数が増え、次年度からは九頭竜中学校として新たなスタートを切る。

生徒は、素直で人なつこいが、一小一中のため人間関係等の変化が乏しく、新たな自分づくりや将来に夢を抱くことに積極的にならない生徒が多いようである。そこで、生徒指導上の諸課題を解決するために、「生徒指導提要」で示された「二軸三類四層構造」に準じて、以下の実践を行った。

①九頭竜中学校に向けて「魅力ある学校づくり」繋ぐ伝統と新たな文化づくりを利用した生徒・教職員の意識改革

## ○教職員研修

## ・協働で行う生徒指導

七割の教職員が若手で経験が浅いため、年度の早い時期に「協働で行う生徒指導」と題して研修会を主催している。「生徒指導とは」「発達支持的生徒指導」「具体的事例で」「ロールプレイ」で構成し、教師の力量形成と生徒の健全育成の土台を作っている。

## ・ポジティブ教育

生徒の人間関係形成力の低下、不登校生徒の増加などを踏まえ、令和五年度からポジティブ教育に取り組むことにした。県教育総合研究

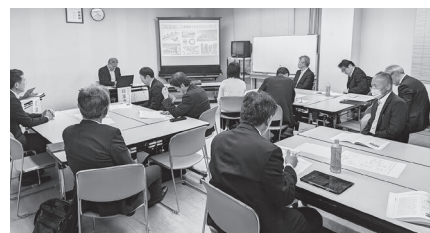
所の有田留美子先生を迎え、ポジティブ教育やピア・サポートについて理解を深めた。六年度は学校適応感尺度「アセス」の見取り方や愛着に課題のある子どもの捉え方、愛着の視点からの支援方法などについて、実際のデータを元に研修を行った。

## ○校内SR(サポートルーム)の運営

不登校気味の生徒だけでなく、個に応じた学習室として、集団での学びが苦手な生徒に対する教室と位置づけている。いきいきサポーターと学習支援員が常駐し、個別の支援計画をもとに学びを進めている。オンラインで教室とつなぎ、リモート学習もできるようにしている。また、管理職や担任、教科担任との連携も頻繁に行うとともに、各生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して規準を作り、全職員で共通理解した。

## ○生徒会を中心とする校則改正

令和五年度に校長と生徒会長で自転車通学のヘルメットは安全マークが付いていれば、どのようなものでもよいと変更したことに影響され、令和六年度の前期生徒会が時代に合った校則に改正しようとして動き出した。一校則は職員会議を受けて、校長の許可が必要であることとだけ生徒に共通理解させ、あとは



自由に生徒会を中心に改正案を作成させた。その後、各学級会で生徒全員の意見を集約して、生徒総会で再度、生徒会提案で議論し、

改正案が練り上がった。この改正案は、九頭竜中学校の校則としても受け継がれていくことを生徒が意識して改正したことに大きな意味があると考える。

②豊かな人間関係の構築のための他者との協働による活動の工夫

## ○道徳教育

内容項目の似ている題材で二、三時間のユニットを組み、より深く考えられるように指導計画を立てた。議論する道徳をめざし、ロイロノートなどを利用することで、普段自分から意見を発しない生徒の意見も共有しながら、考えが深まる時間となっている。振り返りを道徳ファイルにポートフォリオとして残し、学期末や年度末には、自分の変容を客観的に振り返る時間を設定して、成長を促した。

人権集会では、「性の多様性」をテーマに、様々な立場の方の人権を認め合う大切さを当事者の講演から学び、縦割りグループで話し合い活動を行った。また、道徳係と一緒に「心のひろば」という各クラスの良

さや他学年との交流メッセージなどを掲示するコーナーを設置し、啓蒙活動にも取り組んだ。

## ○異学年交流探究学習報告会

校外学習や職場体験の後などに、探究学習の成果や課題について、縦割りグループによるラウンドテーブル形式で報告し合った。年間固定メンバーで行ったことや、上級生が経験知から良きアドバイスができたことにより、互いの信頼関係が構築され、後輩は理想の先輩像も思い描けたようであった。

## ○地域連携

生徒の健全育成には、地域の教育力が不可欠であり、公民館の存在は大きい。地域コーディネーターとして他の団体と繋いでいただくためにも、年度当初に事業計画のすり合わせをし、共同できる活動をピックアップした。

生徒は、「どうしたら楽しんでもらえるか」と主体的に考えて取り組むとともに、地域の方と交流することを通して、地域で生きている実感が湧いたようである。

## ③成果と課題

・学習指導と生徒指導とは表裏一体であり、指導力向上の研修は、なおいっそう具体的で実践的な取組を行っていかねばならない。

・学年を越えた「縦糸」を作る指導と学年間の「横糸」を作るしかけについて考え、各学級でピア・サポートプログラムを実践することができた。その結果、対人関係の基本スキルを学ぶことができ、自

他の存在を認め合い、互いに支え合い助け合うようになってきた。上のような実践を行っていても「困難課題対応の生徒指導」は発生する。この対処的生徒指導に関しても、組織化し迅速に対応できる体制を整えておく必要がある。

## ◎研究協議

・森田中のボランティア活動は、学年や部活動に割り当てられているのではなく、自らが立候補した生徒集団で活動しているのが素晴らしい。地域ボランティアなどの取組が、地域への参画意識や愛着を生み、ひいては生徒の健全育成に強く影響を与えると考える。

・校内SRの支援員と学級担任の連携が大切である。多くの学校において、教育相談担当や特別支援教育コーディネーターが主体的に間をつないでいる。

・相談室や校内SRでの学習内容については、支援員に任せきりではなく、学校によっては、学年教員が責任をもって設定している。

・経験上、校内SRをなるべく職員室の近くに設置した方が、学級担任や学年教員が授業の行き帰りに空き時間に関わりやすくなる。・発表内で述べられていたように、初期対応の遅れがないように、職員間の日々の報告・連携を密にしておくと重要である。また、ファーストコンタクトを誠実に対応することの大切さを自校の教員にも伝えたい。

(社中 見崎洋之)

04  
第四分科会

## 「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

～校内研修を楽しむ学校文化の創造～

発表者 丸岡南中 上田 裕明

## ◎発表要旨

本校の特色である「教科センター方式」や「スクエア制」を活かしながら、教師が個々の指導力を磨くとともに、チームとしての教育力・課題解決力を高めること、ICT活用指導力を高めること、また、地域等と連携・協働し、組織的に課題解決に取り組むことをめざし、OJTをより積極的に進める研修の在り方について研究を進めることとした。

## ①「研究の日」の在り方

「研究の日」の内容は、異なる専門性や経験、得意分野を持つ教員を三つのグループに分け、相互にじっくり聴き合う活動を基本とした。

テーマに合わせて多角的なアプローチを経たものを別の機会に練り直し、整理する作業を継続的に行ってきた。

## ◆成果と課題

他の教員との協働により、自分の知見を広げたり、自分の取組に対する問い直しをしたりなど、都度、新鮮な気持ちで取り組む教員が多く見られた。また、「研究の日」を重ねていくことにより協働体制も整い、教員の心理的安定性の確保にもつながった。

## ②学校経営への参画意識の向上

年度初めの「研究の日」に、学校経営方針における具体的な取組の

見直しを行った。主な内容は、取組内容をより具体的にすること、成果を評価しやすいようにすること、めざし、「〇〇を図るため〇〇を〇〇を行う」のように、教員の行動目標の形に改めることとした。

## ◆成果と課題

・各分掌の組織としての意思統一を図ることや、初めての担当や新任教員であっても、詳細な実施計画を立てやすいようにすることができた。また、全職員で行動目標を共有し、協力して取り組むことで、学校内の円滑なコミュニケーションや協力体制の強化にもつながった。

・具体的な取組を数値化することにより、年度途中の進捗状況も確認しやすく、適切に指導・助言を行うことができ、教員の達成意欲や主体性を引き出すとともに、自分事として捉える機会にすることができた。

## ③教科の専門性の向上

「教科センター方式」のねらいや「生徒にとって学びやすい学校」という学校の理念をより理解するために、教科部会の活性化を図ることとした。

日中は原則としてメディアセンタールで過ごし、相互に授業を見合っ

て、授業改善を図ることとした。

授業改善に関する協議や公開授業の指導案の検討等の際には、教科部会に他教科の教員も交え、率直な疑問や新たな視点を反映できるようにした。

## ◆成果と課題

メディアセンターで過ごす時間を増やすことにより、教科について議論する機会が増加した。特に、経験の浅い教員にとっては、安心して授業に臨むことができた。また、他教科の取組を自身の授業改善に活かす機会にもなった。

## ④ICTの効果的な活用を進めること

教科指導におけるICT機器の効果的な活用については、生徒が自分の考えをまとめ、発表や表現をする場面、教職員と生徒がやり取りする場面について、各教科でどのような取組を行うかを研究することとした。その際、様々な活用挑戦している教員が、同じ教科の教員に使い方を伝えるほか、他の教科における同様の使い方を提案することに重点を置いた。

## ◆成果と課題

情報交換の後、ICT機器の活用が滞っていた教員も、真似をしてみたり、得意な教員をT2として招いたりなどして積極的に活用するようになった。

## ⑤地域等と協働して教育活動を進めること

## ○探究アドバイザーの活用

坂井市教育委員会が委嘱した探究アドバイザーによる研修を行っ

た。海外を含め民間企業勤務の経験があり、現在は経営者でもあるという方から、エビデンスを重視した探究学習の重要性を学んだ。

## ◆産官学との連携

企画案の発表の際には、SDGsパートナーシップ企業・福井県庁・坂井市役所・福井大学・校区の地域コーディネーターの方を助言者として招き、スクエア班に二名ずつ配置し、講評をいただいた。

## ◆成果と課題

・生徒が実際の産業界や公共機関の方と触れることにより、教科書の知識だけでなく、実際の社会で必要とされるスキルや知識を学ぶことができるが、このことは教員も同様である。

・教員も、社会が抱える課題やそれに対するアプローチを生徒とともに考え続けることで教育の質の向上につながる事ができた。

## ◎研究協議

## 「グループ協議の柱」

## ○新たな教師の学びの姿を

実現する研修の在り方について

・週一回四〇分程度、若手教員中心に課題を出し合い研修を積み重ねている。意見を出しやすい雰囲気です。

・年度初めに、校内でテーマを決め、学年や教科を解いて四グループに分けて、年間を通して授業参観や研究会を実施している。

・小中併設校のメリットを生かし、グループをつくり、お互いの授業を見合う研修をしている。子供

の様子も分かり、教職員同士のつながりも深まり効果がある。

・幼小中でペアやグループをつくり、グループ毎にテーマを決めて意見交換を含めた研修を計画している。お互いに連携しながら活動することで教育効果が期待できると考えられる。

・各学年一学級の特設授業を設けて全教員が授業を参観し、研究できる体制を整えている。

・働き方改革の中で、どのように研修の時間を確保するかが課題となっている。

・研修後の「アウトプット」が大切である。授業が教員にとってアウトプットの場となる。そこそがモチベーションの向上につながる。

・学校の研究主題やテーマについて、研究主任や推進委員等が自分の言葉で語れるように共有し、研究を進めることが大切である。

(春江中 近藤光彦)







## Agency (主体性) を育む学校

安居中学校長 森田 史生



本校は校舎新設から十四年目を迎える「全校一体型教科センター方式」という校舎建築が大

きな特色となっています。「志を持つ、挑戦し続ける生徒の育成」を教育目標とし、研究主題は「Agencyへの挑戦」。「学年」クラスの規模、校舎の良さを生かし、生徒が中心の学校づくりを中核に据え、Agency (主体性) を育む学びを展開しています。学校が地区の「学びの文化拠点」となると共に、地域の良さを発見し、地区の発展に寄与する力も育んでいます。

生徒会長が「安居中は生徒が主役で、自分の意志を持って、自分で考え、自分で行動する学校です」と新入生に熱く語りかけている姿から、教育目標を生徒も常に自覚し、Agencyを発揮していると感じています。自分の学びを省察し、自分の生き方を探る「My Learning」も特色の一つで、年に二回実施する探究サイクルを軸に、「学年プロジェクト」が展開されています。今年度はこの探究の学びを教科の学びにも生かしていくことを教職員の協働研究で重点的に取り組んでいく所存です。

## 「励む・磨く・薫る」学び舎に

至民中学校長 齋藤 雅宏



十数年ぶりにこの学び舎に戻ってきました。福井市の特認校、教職大学院の拠点校として

本校が移転開校した時に、八年間勤めて

いた思い入れのある学校です。当時考えられたコンセプトは、現在の学習指導要領に示されているものと大きく違わない、時代を先取りした学校だと自負しています。

校長職の引き継ぎの際に、前任者から「本校では五月の開校式に、校長が全校道徳をするのが慣例になっており、するべきではないか、任せます。」と、いきなり課題を頂きました。生徒に何を伝え、何を考えてもらうかを熟考しました。

学校を大切にする愛校心を育むために校歌や校訓が長年受け継がれてきた意味を、学びや仲間を大切にするために本校がめざすコンセプトを、社会の中で生きる人として、あたりまえのことを人一倍懸命にできるように、凡事徹底を伝えました。話の後「理想の中学校・中学生とは」と「今後どのような行動をしていくか」について全校生徒、教職員に考えてもらいました。全校で考え意見を出し合えたことに、たいへん意義を感じました。

校長として、今後も生徒、教職員がともに考えを深めていける学校を創っていくたいと思っています。

## 豊かな未来のイメージを

大東中学校長 南部 隆幸



人生で八回目の異動で、大東中学校の校長となりました。いつも、新しい環境や出会いへの

ワクワク感から、異動といえは楽しいものと感じていました。しかし、今回は、なぜか不安を感じる時間が長く続きました。

その原因が何なのか、気づくまでに少し時間がかかりました。始業式の挨拶で「まず自分がどう成長したいのかイメージをもつことが大切だ」と生徒たちに伝えたと、自分自身がイメージをもていないことに気がついたのでした。勤務経験のない地域で校長となる自分の姿を想像することが難しかったことももちろんあるのですが、部活動がなくなってしまう中で今後の中学

校がどう変わっていくのか、教員不足が続く中でこれからの学校や管理職がどうあるべきなのか、こうした福井の中学校の未来の姿が見えていないことに気づきました。

若い先生たちには「こんな先生になりたい」という希望を、中堅の先生たちには「こんな学校経営がしたい」という目標を描けるよう、私自身が豊かな未来の学校のイメージを作り上げていかなければならぬのだと感じています。

## 未来で輝く生徒を育てたい

足羽中学校長 谷口 直之



本校は、福井市南部に位置し、泰澄が開山した越前五山の一つ「文殊山」を仰ぐ場所に

あります。

年度始め、全職員でスクールプランを見直し、学校教育目標について意見を交わした時のことです。実は、本校は野球の吉田正尚選手や競輪の脇本雄太選手、陸上の吉田香織選手など、一流のアスリートを輩出している学校です。そこで、なぜそのような選手が育つのか、どうしたらそのような流選手になれるのかという話になりました。そして、そうした流の先輩方に共通していることは何だろうと考えたところ、「失敗しても失敗しても、もう一回やってみよう」という努力を続けられる人なのではないかという考えに落ち着きました。

そこで、学校教育目標の一つを「挑戦を楽しむ、努力し続ける生徒の育成」としました。生徒たちには全校集会で素晴らしい先輩たちの紹介をすると同時に、この一文に込めた全職員の熱い願いを伝えました。さらに、本校教員には「とんがりゾーン発見」という合い言葉があり、生徒の良さ・強みを発見し、さらにとんがらせようという共通認識があります。誰もがもつ「小さなとんがり」に気づかせ、努力し続ける生徒をサポートすることで、未来で輝く生徒を育てていきたいと思っています。

## 自分を語れる生徒に

美山中学校長 岡本 浩之



足羽川の清流に沿う本校は、周囲を美山杉に囲まれた、美しい自然の中にある全校生徒

五六人の学校です。本校の教育目標は、ゆかしく、たのしく、たくましい生徒の育成です。生徒たちが、自ら考え判断、行動したり、もっているよい心構えの「美山しぐさ」を実践したりしながら、思いやりをもった温かな学校を自分たちの手で創りあげていこうとしています。私は全校生徒三人の小学校が新採用でしたので、初心に戻った気持ちで今、勤務しています。

五月の開校記念日には、生徒たちに、「自分を語れる生徒」「学校を語れる生徒」「地域を語れる生徒」になってほしいという話をしました。これは私の尊敬する校長がよく話していた言葉です。自分はどんな人になりたいのか、自分が通う学校はどんな学校なのか、そして、自分の住む美山や福井はどんなところなのかを現在または将来、様々な人に対して自分の言葉で語れる人になつてほしいと思っています。

今後、生徒たちが様々な活動を通して、地域に誇りと愛着をもち、希望に満ちた将来像を描けるように努力していきたいと考えています。

## 地域とともに歩む学校を目指して

上志比中学校長 中山 幸枝



驚ヶ岳や九頭竜川の美しい景色に囲まれたこの地域で、「教職員も生徒もともに生き生き

と活動に励む学校」を創っていきたくと心新たにしています。これまでの教育現場での経験を通じて、生徒一人一人の成長を見守り、支援することの大切さを実感してまいりました。上志比中学校でも、生徒たち

が安心して学び、成長できる環境を整えることを最優先に考えております。

上志比中学校は伝統である「礼の心」を大切に、生徒たちが心を整え、礼儀正しく思いやりのある人間に成長することを目指しています。また、今年は「地域に貢献し応援される上中生になろう」をスローガンとして、これまで以上に保護者の皆様や地域の皆様との連携を深め、共に地域を盛り上げるため参画していこうと種をまいています。芽が出て花開き、実り多きものになつていくことを願ひ尽力します。

上志比地区には弁財天白龍大権現(全国で四カ所)があります。運がいいと「白蛇様」に逢えると謂われています。巳年も折り返し、ぜひお近くにお越しの際はお待ちください。

## 「誰もが『幸せ』を実感できる学校」を目指して

開成中学校長 増田 善宏



本校は昭和四六年に、有終中学校と小山中学校が統合され、開成中学校が発足しました。

また、令和六年に大野市内の中学校が再編され上庄中学校と統合しました。今年度は、全校生徒三三三人、職員数四八人でスタートしました。

私が目指す学校像は「誰もが『幸せ』を実感できる学校」です。生徒の視点では、「自分の思いを受け入れてもらえる」など安心感や自己肯定感を育む人間関係づくりを学校全体で取り組んでいきたいと考えています。また、生徒が自律した学習者になれるよう、生徒自らが考えを持ち説明を行ったり、対話を通して学び合いを行ったりする授業づくりを推進していきます。教職員の視点では、私自身がサバントリダーシップを発揮し、教職員一人一人のアイデアや主体的に行動する力を引き出すことができよう、対話を通して互いに学び



合う集団づくりを進め、教職員が相互に学び合い、高め合う組織を構築したいと考えます。保護者の視点では、学校だよりの発行、学校公開や「校長とさくくばらん」話し合う会」の実施を行い、保護者が安心できる学校にしていきたいと思っています。

目指す学校像の実現に向け、今後とも職務を通して自分の無知に気づき、学び続けるように頑張っていきます。

## 春風を以て人に接し……

越前中学校長 山本 貞郎



丹生郡越前町の海岸沿い、南北にのびる越前地区の中央に本校はあります。私は、本

校を四二年前に卒業し、平成八年度から五年間、教諭としてここに勤務しました。この度、校長として母校に赴任できたことは、大変幸せであると同時に、地域からの注目や期待に緊張も入ります。

さて、本校は令和五年度に創立五〇周年を迎えました。この五〇年の間に生徒数は激減し、創立時は四七〇人を超えていた生徒数が、今では七〇人を切っています。少子化の波に抗いながら小規模校の強みをいかし、生徒一人一人に目と声と心を配り、きめ細かであたたかい教育を進めていきたいと考えています。

本校は、小高い丘の上にあるため、生徒は、毎朝急な坂道を歩いて登ってきます。夏には猛暑の中、大汗をかきながら、冬には風雪の中、寒さに凍えながら毎日登校してくるのです。そのような彼らに対し、私たち教職員は、「今日も偉かったね」「毎日頑張っているね」という気持ちで接していきたいものです。

教育目標「自ら求め、磨き、高め合う生徒の育成」へ向かう第一歩として、同僚・生徒・保護者へのリスペクトを大切にしていきたいです。

## しらやま魂

武生第五中学校長 八田 天



本校は越前市の一番西方の白山地区の「やまがれい」と呼ばれる高台にあり、全校生徒

二六八、職員二八人の小さな学校です。かつては三〇〇人近くの生徒数でありましたが、現在は平成四年に建てられたきれいな校舎とグラウンドで、少人数で伸び伸びと活動をしています。

地域とともに歩む「開かれた学校」として、スイカづくりと販売、サギ草の栽培、そしてコウソトリの舞い降りる美しい自然を学びの舞台に、日々生徒たちは生き生きと学んでいます。その成果として昨年は「ふるさとの学び特別賞」にて優秀賞をいただいたり、創作アイデアロボットコンテストの全国大会にも出場し、審査員特別賞を受賞できたりしたことなども、子供たちの自信につながりました。

しかし、近年、人口減少の影響は本校にも及び、今後の学校の在り方を地域とともに真剣に考える毎日となっています。しかし、学校はこの「小ささ」を強みに変え、一人一人の顔が見える教育、地域とながら学びをさらに深めていっています。子供たちが地域を誇りに思い、自信と笑顔にあふれる学校づくりを、これからも地域と一緒に元気に進めていきます。

## ふるさとの未来を創る

池田中学校校長 飯田 雅裕



本校は、足羽川の上流の四方を緑豊かな山に囲まれた盆地の中央に位置し、創立七八年

を迎えました。

二〇二三年十一月に岐阜県に通じる国道四二七号線(冠山峠道路)の開通とともに、「ツリーピクニックアドベンチャーい

けだ」「こどもと森」「フォーシーズンズテラス」などの観光施設も建設されました。中京圏からの交通量が増え、町の賑わいが増しています。

池田町の特色ある研究として、こども園、小学校、中学校の教員が合同で池田の教育研究を行う「幼小中研究会」があり、昭和五三年に前進の小中研究会が発足してから、四十七年になります。今年度も八年度目になる「ポジティブ教育・協同的な学び」を中心に据えて取り組んでいます。

今年度の本校の学校教育目標は、「ふるさとの未来を創る生徒の育成」を掲げて、主体的、探究的に学習する生徒・自主的に行動できる生徒・心身共に健康でたくましい生徒・社会に貢献しようとする生徒の育成に努めてまいります。

## 温かき尊重を育む「小規模特認校」

東浦中学校長 藤岡 歩



みかんの丘にある本校は、県下唯一の「小規模特認校」として地域の特色を生かした教育を行なっています。地元の子供たちと市内様々

な所から通う子供たちが一緒に学び、交流を深めることで多様な価値観や友情を育んでいます。互いの違いを尊重し励まし合う姿は、まるで一つの大きな家族のようです。校長としてその家族の一員に加わることでできても嬉しく思っています。

当校では、小学校と中学校が一体となった九年間の貫教育を実施しています。長期にわたる学びの連続性を確保し子供たちが安心して成長できる環境を整えています。全学年、教科担任制を導入し、小学校教員が中学校で、中学校教員が小学校において授業を担当し、学習内容のつながりを深め子供たちの理解を促進しています。また、地域の自然や文化を活かし、みかん栽培や地域行事を通じて地域とのつながりや自然への理解も深めています。今後、子供たち一人一人の個性と可能

性を大切に、温かい学びの場を築いていきたいと考えています。地域と連携しながら自然豊かな環境の中で、安心して成長できる学校づくりに努めてまいります。

## 校長としての「自芯」をもつて

名田庄中学校長 山本 毅



新任校長として

本校に赴任するまでの五年間、五人の校長先生方の下で教頭職を務め

させていただきました。コロナ禍一年目に「子供の命・安全第1」を掲げられ、感染防止対策を含めた安全管理の徹底に注力された一人目の校長先生。コロナ禍でも「学びを止めない」を合言葉に、積極的な校外探究学習を推進する等、学びの充実を最優先された二人目の校長先生。へき地複式校にて「子供とともに」をモットーに、常に子供の輪の中に入って活動された三人目の校長先生。「現状維持は後退と同じ」を戒めに、学校DXを強力に推し進められた四人目の校長先生。「誰一人取り残さない」の言葉どおり、不登校傾向にある子供への献身的な対応に尽力された五人目の校長先生。いずれの校長先生も確たる信念、いわば「自芯」をもつて学校経営にあたり、学校組織を動かされていたことを、最も近い立場から学ばせていただきました。

この貴重な学びを土台としつつ、目の前の教育課題と対峙しながら学び続けることで、自分なりの「自芯」をもつて、本校の子供の幸せ、教職員の幸せを実現させるために邁進していきます。

## 特色を生かして

内浦中学校長 松井 昭男



本校は、福井県と京都府との県境に位置する小・中併設のへき地校で、海と山に囲ま

れた自然豊かなところにある学校です。本校は各学年とも少人数学級であり、学級単位で活動するよりも多学年で活動する機会が多いです。そのため、本校の生徒は素直で思いやりがあり、上級生が下級生の面倒をよく見、互いに相手のことをよく理解した上で交流することができています。

こうした実態を踏まえて、少人数の学習形態の中で主体的に学ぶ子供や、ふるさとへの誇りや愛着をもち、ふるさとの良さを自ら発信していける子供を育てていく必要性を強く感じます。また、変化の激しい現代社会において、自ら課題を見つけ、進んで解決できる力も育てていきたいと考えています。「課題解決に向け自ら進んで活動する子の育成」を学校教育目標に掲げ、小・中併設のへき地校という本校の特色を生かした取組を行っていく中で、より主体的に行動できるたくましい生徒の育成に努めていきたいと思っています。

## 編集後記

会員の皆様の御協力を賜り、第一五〇号発刊の運びとなりました。原稿執筆に御協力いただきました皆様、厚く御礼申し上げます。

令和七年度も、気がつけば夏の暑さが本格的になる季節を迎えました。皆様の御健康と御多幸を心よりお祈り申し上げます。

「広報部」

